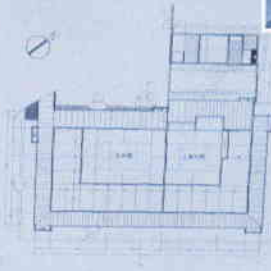
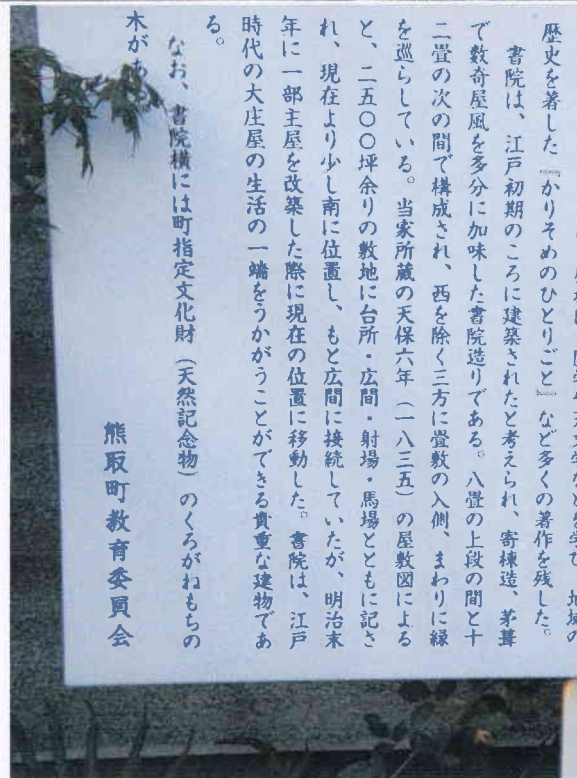


# 1 降井家書院

- ▶ 降井家は、中家と共に熊取地方の豪族であったと伝えられ、降井家所蔵の天保6年(1835)作成屋敷図によりますと、2,500余坪の敷地に台所、広間、書院、土蔵、厩などの広大な邸宅を構え、射場、馬場まで備えていました。台所、広間等は縮小したものに建て替えられ、書院も元広間に接続していたようですが、広間と切り放して今の所に移されました。その他の建物では、後に出来た表門と鎮守を残すだけです。書院は江戸時代初期頃の建立と認められ、その後、柱、縁廻り等相当大きな修理を受けています。建物は8畳の上段の間と12畳の次の間で、その三方に畳敷の入側がありました。更にその外側と背面に縁側があります。上段の間は8畳で、床、棚、書院を備え、次の間との境に、彫抜欄間をはめ、内法長押、天井長押を設け、次の間は12畳で面皮柱を用い、入側との間の鴨居上の窓を竹格子にするなど、数寄屋風を多分に加味した書院造りとなっています。上段の間の床、違棚の張付絵、間仕切襖及び障子等も当初のものと認められるものです。天保6年(1835)に作成された屋敷図は、江戸時代豪族邸宅の構えを示す一例として本書院と共に重要な資料となっています。建立以来、その後の修理は明らかではありません。昭和30年(1955)の屋根葺替修理の際に、文政13年(1830)、明治2年(1869)、同17年(1884)、同41年(1908)の屋根葺棟札が発見されました。明治末年に主屋を改築した際に現在の位置に移動し、一部を改造しました。昭和27年(1954)3月29日、国の重要文化財に指定されています。



降井家書院平面図

重要文化財

降井家書院

附 屋敷図一帖

指定年月日 昭和二十七年三月二十九日

降井家は当地の豪族であり、江戸時代、岸和田藩の郷士代官や七人庄屋をつとめた家柄で、熊取谷の大庄屋として村々の年貢徴収や年寄・組頭の決定など、熊取谷の行政全般を委ねられた。貞享二年(一六八五)には、岸和田藩の藩札発行の札元にも任じられ、藩の経済にも貢献している。また、江戸末期に当主をつとめた盛彬は、国学や天文学などを学び、地域の歴史を著した「かりそめのひとりごと」など多くの著作を残した。書院は、江戸初期のころに建築されたと考えられ、寄棟造、茅葺で数寄屋風を多分に加味した書院造りである。八畳の上段の間と十二畳の次の間で構成され、西を除く三方に畳敷の入側、まわりに縁を廻らしている。当家所蔵の天保六年(一八三五)の屋敷図によると、二五〇〇坪余りの敷地に台所・広間・射場・馬場とともに記され、現在より少し南に位置し、もと広間に接続していたが、明治末年に一部主屋を改築した際に現在の位置に移動した。書院は、江戸時代の大庄屋の生活の一端をうかがうことができる貴重な建物である。

なお、書院横には町指定文化財(天然記念物)のくらがねもらの木がある。

熊取町教育委員会

## 吉田松陰宿泊の地 中 左近邸跡（中家）

泉南郡熊取町五門西1-11-18

- ▶ 中家は平安末期、後白河法皇が熊野行幸の際立ち寄り、行宮（仮御所）とした由緒ある旧家です。中家は江戸期、岸和田藩の郷士代官として、七人庄屋の筆頭を務めた家柄です。五門・野田・紺屋・小垣内・宮・久保・下高田の村の年貢徴収や年寄・組頭の決定権を持ち、この地の行政を委ねられていました。元禄5年(1692)には岸和田藩の藩札の札元に任命されています。

嘉永6年(1853)3月3日、吉田松陰は岸和田を発ち、熊取の中 左近(中 瑞雲齋)を訪ねました。松陰は中家に3月3日から5日の3日間滞在しています。

吉田松陰著の旅日記「発丑遊歴日録」では次のような記載があります。

(嘉永6年)三月三日 岸和田を發し、熊取の中 左近(なか さこん)の家に至る、二里。  
 醫生 佐海祐齋(さうみゆうさい) 數々(しばしば) 来る。  
 五日 熊取を發し、岡田の山田文英の家に至る。行程二里。岡田は一漁村なり。  
 文英の門生に西川俊齋と云ふものあり、紀の人なり。  
 十七日 熊取を發し、堺萬戸を過ぐに至る。行程七里。道に佐野三千戸・貝塚朴飯領・岸和田を經。  
 泉州繁盛の地は此の四處のみ。  
 十八日 増田秀齋・小林新介を訪ふ。午後、富田林に至る。行程四里。  
 晦日 晴。富田林を發し、大坂に至る。行程六里。南波邦五郎の家に宿す。  
 四月朔日 晴。後藤春藏・藤澤昌藏即ち高松東咳なり、を訪ふ。  
 二日 晴。坂本鉦之助・奥野彌太郎遠近但馬守の臣を訪ふ。  
 三日 晴。 後藤春藏を訪ふ。○泉州熊取の人佐海祐齋(さうみゆうさい) 故ありて屢(しばしば) 富田林に来る。祐齋は本(もと) 商にして、泉の豪商食野氏の番頭となりしが、後に食野氏の産落(くず)れ、祐齋も亦産を取る、名を改めて醫となり、頗る読書を好む。初めて中氏にて逢ひ、後は常に文辞の交を為す。余を送るの詩あり。余次韻して之れに答ふ、云はく。

熊谷騷人未出村	熊谷(ゆうこく)の騷人(そうじん)未だ村を出でざれど
偶聞文戦欲銷魂	偶々(たまたま)文戦を聞いて魂を銷さんと欲す。
勢州消息何須報	勢州(せいしゅう)の消息何ぞ報ずるを須(もち)ひん、
名義由来有定論	名義由来定論あり。

(以下省略)

松陰は、中 左近から清国で起こった「太平天国の乱」について詳しく聴きました。また、松陰滞在中に、熊取の医師である佐海祐齋(さうみゆうさい)が中家を訪れ、松陰と会談し漢詩の交換を行っています。

### 中 左近(中 瑞雲齋)

松陰の来訪から10年後、熊取を飛び出して京都で尊王攘夷運動に奔走しました。平安時代に起った保元の乱で崇徳天皇が讃岐に流されたことに対し、手厚く祀りなおし、天皇政権の挽回を強く主張しました。(明治元年(1868)に実現しています。)

横井小楠暗殺事件に関係し、明治4年(1871)内乱陰謀罪で獄死しています。

中家住宅は、昭和39年(1964)5月29日に国の重要文化財に指定されました。主屋は入母屋造り、茅葺き、妻入りで、周囲に本瓦葺の庇をめぐらしています。中家住宅は、現在でも広い敷地を占めますが、江戸時代後期の古い図によると、今よりもはるかに大きく、主屋の東側には別棟の式台玄関のつく客殿(書院)がありました。



重要文化財に指定されている中 左近邸(中家)

### 3 橋本宗吉電気実験の地

泉南郡熊取町五門西1-11-18

- ▶ 中家住宅の主屋西側に樹齢600年の松の木があり、大坂蘭学の開祖 橋本宗吉(曇齋)が、中家の協力でこの松の木を使って電気実験を行いました。実験内容は、避雷針の発明につながったフランクリンの実験を自ら試してみたものだったようです。松の枝に取り付けられた桶から針金を下まで垂らし、その下で一人がそれを持ちます。別の人がその人と手をつなぎます。雷雲が来て空中の電気を捉えた瞬間、針を持っていない人の指に火花が散りました。実験に使用された松の木は腐ってしまい、現存しません。



実験に使われた松があった場所に立つ石碑



大手電機メーカー本社のある橋本宗吉(曇齋)像

### 4 井原西鶴著の「日本永代蔵」ゆかりの地 廻船業の街 佐野

泉佐野市

- ▶ 泉佐野では廻船業が室町時代から始まっており、豊臣秀吉の朝鮮侵略の時にも佐野の船が多く使用されました。佐野の廻船業が大きく発展するのは、幕府の政策によって大坂が天下の台所となり、下関海峡を通過する「西回り航路」、江戸と大坂を結ぶ「東回り航路」が開かれた17世紀後半です。この頃から食野家、唐金家、矢倉家の北前船が奥州まで手を伸ばし、巨額の富を築きます。元禄期(1700年頃)に泉南地域には9ヶ浦と貝塚の合計10ヶ所の港がありました。なかでも佐野は、廻船だけでなく漁船でも群を抜いて多数の船を持っていました。(第2位は嘉祥寺浦、第3位は貝塚浦)紀州街道から浜に通ずる道で、荷物を積み降ろした荷車が往来した「くるまみち」が当時の面影を残しています。



車道(くるまみち)



めしの

## 食野家

食野家は、江戸時代(和泉)佐野を本拠地に大富豪となった廻船問屋の一族です。

本家の幼名は佐太郎または次郎左衛門を襲名。

分家は、吉左衛門を名乗りました。

室町時代中頃には、すでに佐野に住んでいたようで「食野家系譜」には楠木氏の子孫であると書かれています。

食野の廻船は、西回りの航路が開かれて「北前船」をあやつり、天下の台所「大坂」と奥羽地方とを結びます。大坂からは、木綿、綿実、菜種油。北国からは、米、ニンジン、ほしか(干鰯)などを高い、往復で巨財を築いていきました。

宝暦11年(1761)、鴻池、三井、加島屋等の大富豪と並び同額の御用金を受け、文化3年(1806)には、三井とともに本家が3万石。分家が、1万石の買米を命じられています。

食野家は、岸和田藩を含め、全国の大名に資金を用立てていました。

「加賀の銭屋か和泉のメシか」と言われるほどだったようです。

参勤交代には必ず、紀州徳川藩主が「食野家」に立寄ったと言われます。

ざれ唄に、次のようなものがあります。

### 紀州の殿様なんで佐野こわい、佐野の食野に借りがある

ところが、幕末には、廻船業が振るわなくなり、そして、明治時代の廃藩置県で大名貸した貸し金が殆ど貸し倒れとなり、一気に没落してしまいます。

屋敷跡は第一小学校で、松の木と井戸枠が残っています。海岸筋にはいろは48蔵といわれた倉庫群があり、近年まで約10蔵残っていましたが、腐敗で取り壊されていき、現在は2蔵のみ残存しています。

食野家の別荘が大阪市西淀川区春日出にありました。紀州徳川家の別荘だったものを食野家が譲り受けました。

しかし食野家の財政難で天保期(1830年頃)に売却され、明治39年(1906)、横浜の原富太郎が所有することとなり、横浜市中区本牧三之谷にある「三溪園」という庭園に移転となり「臨春閣」と命名されました。「臨春閣」は昭和6年(1831)に国宝に指定されましたが、第二次世界大戦のとき大破。

戦後に修復され再び重要文化財として国から指定を受けて保存されています。

からかね

## 唐金家

食野家、矢倉家と並ぶ江戸時代の佐野の豪商。廻船業を始めとして手広く商いをを行い、大坂や江戸などの大都市にも進出していました。

唐金家は当初、森という苗字を持っていて医業を行っていました。江戸初期に唐金と名乗り、食野家と同様に廻船業を営み、食野家と婚姻関係をとり続けました。

唐金家の富豪ぶりは、井原西鶴の浮世草子「日本永代蔵」にも書かれています。

「日本永代蔵」には、神通丸という3700石積(当時日本一の大型船)を所有していたとあります。

食野家と姻戚関係を濃密に結び、食野家も同時期に全国市場に乗り出していたので、よく混同されているようです。

また元禄時代には唐金梅所という文人も輩出しています。

### 唐金梅所(からかねばいしよ)

延宝3年(1675) - 元文3年(1738)

通称を喜右衛門といいます。

食野家に生まれ、後に唐金家の養子となりました。彼が常に梅を愛していたことから、梅所を号したといわれています。生来学問を好み詩文が優秀で、新井白石、伊藤東涯、祇園南海などの有名な碩学者と交流がありました。

彼が建てた「垂裕堂」落成の時には、前記詩友のほか有名な詩人から詩が送られ、彼はそれをもとに「垂裕堂八景」を編纂しています。

この他の著書としては詩集「梅所詩稿」2巻などがあります。

現在、梅所の墓は、佐野共同墓地にある食野家の墓域にあります。

## 日本永代蔵

井原西鶴作の浮世草子で、町人物の代表作の一つです。

貞享5年(1688)に刊行され、各巻5章、6巻30章の短編からなり、井原西鶴代表作のうちの一つです。

副題として「大福新長者教」。

金持ちはいかにして金持ちになったか、町民の生活のの心得を飾らずに描いた内容になっています。

文中に登場するのは「食野家」ではなく「唐金家」です。



井原西鶴像(生國魂神社境内)